

## アジアへの視点を、アジアからの視点を



京都大学大学院工学研究科都市環境工学専攻

教授 **武田 信生**

(廃棄物学会第9期会長)

この数年のことであると思うが、水菜のサラダというのが現れて、ヘルシーな感覚からか、結構人気があるようである。生の水菜がオニオンとともに盛られ、何と、カツオ節がトッピングされ、ドレッシングがかけられている。関西の田舎で育った筆者は水菜が嫌いであった。何せ、安物の野菜であり、油揚げと一緒に煮付けられたものが冬の定番で、うんざりするほどの頻度で食卓にのぼったからである。水菜のサラダは和食か洋食か？サラダにカツオ節を乗っけるなど、わが国の料理人の貪欲な創造力・融合力には感心した。

21世紀は環境の世紀といわれるが、同時にアジアの世紀でもあると考えられる。冷戦が終焉し、地球の一部では相変わらず熱戦が繰り広げられ、またある部分では平和が続いている。「東西」という単純な呪縛から解放された世界は、その確固たる行き先が見えないままに新しいモデルを模索している。

鉄のカーテンから解き放たれた東欧圏、ヴェトナム戦争を終えた東南アジア地域、改革開放路線をひた走る中国は、そろって経済至上主義といえるような成長路線を歩んでいる。そのこ

とから、地球規模での資源・エネルギー争奪戦が展開されているし、一方で地球規模での環境汚染が深刻な問題となりつつある。

最近パリで開催された国連の気候変動に関する政府間パネル(IPCC)第一部会では、21世紀末の地球の平均気温が20世紀末に比較して最大6.4℃上昇するという恐るべき予測が報告されたという。

昨年春に中国本土で黄砂を経験した友人のはなしでは、中国本土では「つぶて」のような石ころがびゅんびゅん飛んできて、列車の窓がすべて割れてしまうほどであるということである。大陸では、もはや砂の問題ではないということらしい。粒径が小さい砂の部分だけが、遙かわが国にまで飛来してくるわけであるが、毎年春になると特に西日本では招かれざる客として黄砂を迎えることになる。酸性雨についても大陸の影響が大であるということは周知の事実である。水についてはどうか。長江(揚子江)が運んでくる汚濁物質は東シナ海(東海)の生態系にインパクトを与え、わが国の漁業にも大きな影響を及ぼしているものと考えられる。

わが国は1960年代から今日にかけて、強力な

---

行政施策や技術開発を通じて公害問題・地域環境問題を克服してきた。しかし、今や資源・エネルギー問題とも密接に絡む環境問題は地球規模の問題に拡大し、一国における取り組みでは十分な成果を挙げ得ないことが明らかとなってきた。

わが国で、ある種の製造業からの汚染物質の排出規制濃度が10 ppmであるとしよう。さらに環境規制を強めようと5 ppmに下げようという論議がしばしば起こる(Case Aと呼ぼう)。ところが、彼の国では未だに500 ppmの濃度で排出しているのが実態である。彼の国の排出を、せめて10分の1の50 ppmに抑制しよう(Case Bと呼ぼう)。Case AとCase Bではどちらが合理的かつ有効か？ほとんど議論の余地はないであろう。わが国では、コストの増分に対して便益の増分がほとんど見込めない、あるいは僅かであるよう地点にまで進んでしまっている分野が多くあるように思える。「環境」を享受するためには、より有効な地点に投資をしていくことが重要になってくるだろう。大気や水や、あるいは農作物等を通じて固体までもが世界中を循環している社会では、環境対策や省エネルギーの技術をどこで実施すべきかを地球規模で考え

ていかなければならないだろう。

13億の人口を擁する中国の環境問題の解決なくしては、東アジア、ひいては地球全体の環境問題の解決は図れないと考えた筆者らは、環境関連企業からの醸金をお願いして、一昨年、京都大学に寄附講座「日中環境技術研究講座」を立ち上げ、その研究・教育活動を中国・清華大学の深圳校において開始した。わが国が公害問題に苦しみ、これを克服するために開発してきた環境技術やそのための知見や経験を中国において活かすことは日中両国の地域的ならびに広域的環境問題の改善に大きな貢献となり、両国民の利益に繋がることとなる。わが国の技術が、国内のみの技術で終わることなく、世界をリードする技術と成り得る機会ともなる。また、環境保全に係わる若き技術者を、日中両国間で同じ基盤に立って育てることは、将来の環境保全にとって最も効果的かつ不可欠であると考えられたからである。

その際に重要であるのは、西洋近代を模倣した現代日本を持ち込むのではなく、アジアの風土に育まれた「共生」的生き方を共に学ぶ姿勢、そして創造力・融合力ではないかと思う。